

河内鑄物師の実像に迫る

大阪の中世史のなかで「河内鑄物師」とよばれる鉄・銅の鑄造職人の活躍が知られている。河内国丹南郡（堺市美原区や東区日置荘）の鑄物師が著名で、発掘調査により12世紀から15世紀初頭にかけての鑄造工房が明らかになっている。また文献からは、八上郡の長曾根・金太郷（堺市北区）においても、同じ頃から鑄物師が活動していたらしい。彼らは、鉄灯籠などを朝廷に貢納する供御人となり、通行・販売の特権を与えられ、特産品である河内鍋や羽釜などの鑄鉄製品を生産・販売し、また各地に残る寺院の梵鐘に名を残しているように鑄銅品も製作し、各地に出向いて鑄造を行うこともあった。

また、五箇庄とよばれた大阪市立大学（大阪市住吉区）近辺にも鑄物師がおり、14世紀後半から17世紀前半まで活動していた。しかし、1569年に堺の実力者である今井宗久が五箇庄の代官となり、その支配を受け、やがて都市の鑄物師として大坂をはじめ各地に移動したようである。

本シンポジウムでは、これまでの鑄造工房の調査や製品についての研究の進展をふまえ、河内鑄物師の実像がどこまでわかっているのか、わかりやすくお伝えしたい。

午前の部 10:00~12:00

河内鑄物師を考える

岸本直文（大阪市立大学文学研究科）

本シンポジウムでは、名前は聞くものの内容はよく知られていない河内鑄物師について、これまでの研究や調査された鑄造遺跡の概要を紹介し、いくつかの地域集団があり、それぞれの活躍時期や技術・製品などを整理することで、いま捉えられる全体像を考えてみたい。そこで、各報告に先立ち、趣旨説明とともに、研究史、鑄造とその技術、関係する遺跡の所在地や概略など、理解を助けるための基本事項を解説しておきたい。

河内鑄物師全国展開の虚実

市村高男（高知大学名誉教授）

これまでの研究史をたどるなかで、鑄物師とその社会に関する現在の到達点を提示し、そこに伏在する問題点を見出ししていく。そして、その問題点が真継家の全国鑄物師の支配の展開と不可分な関係にあることを指摘するとともに、15世紀を分水嶺とする鑄物師社会の転換の様相を解明し、あわせて河内・和泉鑄物師の動向についても言及する。

丹南鑄物師遺跡の調査—大阪府の調査を中心に—

小浜 成（大阪府教育庁文化財保護課）

大阪府教育委員会および（公財）大阪府文化財センターによって1980~90年代に阪和自動車道の建設や府営住宅の建て替え工事等に伴う丹南鑄物師関連遺跡の大規模な調査が行われ、鑄物師集団の屋敷や工房に関する重要な知見が得られている。調査から四半世紀を経た現在、その成果をもとに、丹南鑄物師遺跡の様相について改めて検討してみたい。

午後の部 13:00~15:20

大阪市内の遺構・遺物からみた河内鑄物師とその系譜

小田木富慈美（大阪市文化財協会）

文献より五箇庄に8ヶ村あったとされる鑄物師集落の中で、大阪市内では我孫子・菟田の鑄物師に関する14~17世紀初頭の遺構・遺物が確認されている。このうち菟田では15~16世紀の鑄造工房施設と集落の姿が明らかとなった。溶解炉等の特徴からみて、市内では同一技術の系譜を14~17世紀中頃まで連続的に確認できる。さらに、類似した溶解炉等は他地域でも確認されており、技術伝播の可能性を示唆する。

中近世都市・堺の鑄物生産と金属精錬

嶋谷和彦（堺市文化観光局文化財課）

中世後期~近世初頭を中心とする日本の代表的な都市のひとつである堺は、これまでの発掘調査により様々な遺物が大量に出土し、屈指の大消費地であったことが考古学的にも裏付けられている。その一方で、出土遺物の中には骨・角細工、瓦生産、陶器生産に関わる資料もあり、鑄物の生産や金属の精錬を実施していたことも判明している。今回はこうした都市・堺における金属製品の生産について、若干の整理と検討を行いたい。

河内の鑄鉄製鍋釜と青銅製梵鐘

五十川伸矢（鑄造遺跡研究会）

遺跡の出土品・寺社の伝世品・鑄造遺跡出土の鑄型の三者にわたる、金属製の鍋釜と梵鐘の鑄物資料の分布・様式・銘文・技術の分析によって、坪井良平先生の研究に学びつつ、河内鑄物師の作品を厳密に抽出する作業を紹介する。そして、彼らが中世において鑄物生産を全国的に牽引したという「河内鑄物師伝説」をのりこえて、中世日本の鑄物生産の特徴や、その変容の実態などについてお話ししたい。

ディスカッション 15:30~16:30

